

# JCA

Japan Communication Association (JCA) Newsletter 日本コミュニケーション学会ニュースレター

# NEWS

120 2019.2

## CONTENTS

1. 巻頭言 学術局長挨拶	..... 1	8. 書評	.....16
2. 第49回年次大会 会場校案内	..... 3	9. 支部ニュース：北海道支部	.....18
3. 2018年度 第2回理事会報告	..... 4	支部ニュース：東北支部	.....18
4. 第48回年次大会 会計報告	..... 7	支部ニュース：関東支部	.....19
5. 学術局報告	..... 9	支部ニュース：中部支部	.....19
年次大会 発表論文・セッション募集	..... 9	支部ニュース：関西支部	.....20
学会誌に関するお知らせ	.....11	支部ニュース：中国・四国支部	.....21
学会賞応募に関するお知らせ	.....12	支部ニュース：九州支部	.....21
6. 事務局報告	.....13	10. メールアドレス登録のお知らせ	.....23
7. 広報局便り	.....14	11. 編集後記	.....23

# 巻頭言

## コミュニケーション研究における学問的多様性の意義

学術局長 山口 生史 (明治大学)

この度は、平成時代最後となるニューズレターの巻頭言を執筆する機会を賜り誠にありがとうございます。本年度6月に学術局長に任命され、同時に数年ぶりに理事に復帰しました。新しい時代のスタートとともに本学会に少しでも貢献することができればと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

学術局長という立場で、ここで何を書こうかと考えながら、本学会のジャーナルのページをめくっていると、あることに気が付きました。本学会の研究では、「チームサイエンス」が少ないなということです。実は、本巻頭言の執筆依頼をいただいたちょうど前日に、「チームサイエンス」関係の日本の研究会で招待講演をしてきたところでしたので、そのことに気が付いたのです。十二・三年くらい前に、米国で出現した the Science of Team Science という学際的研究分野において核となる概念である「チームサイエンス」は、科学の学際的な共同研究で、研究者が相互依存、相互作用して、学際的にかかわっていくリサーチと説明されています (Falk-Brzezinski, et. al., 2010; National Research Council, 2015)。この定義から、私は、チームサイエンスの重要な特質とその意義は、「学問的多様性」にあると思いました。それゆえ、チームサイエンスは、日本のコミュニケーション学の発展にも必要な研究の形だと考えています。

組織コミュニケーション学および組織論の観点から考えると (実際、チームサイエンスの研究には組織論研究者が多くかかわっている)、チームサイエンスの意義は、学問的多様性が科学の生産性を高めるという点にあるといえます。現在のようなグローバル化や政治的・経済的変化の激しい時代にあつては、組織は常に学習と変革を行い、流動的な環境にうまく適応していかなければ、衰退していくのが必然です。組織が学習し、変革するためには、価値観や考えや意見の違いといった多様性 (ダイバーシティ) が生み出すコンフリクト (対立、摩擦) が必要不可欠で、それがなければむしろ起こしたほうが良いというのが現代の組織論の主流の考え方です (ただし、ダイバーシティマネジメントやコンフリクトマネジメントがうまくできればという条件付きですが)。これは研究における学術チームにもいえることで、多様性に富んだ研究者の共同チームによる研究が、学問の発展を維持し、さらに促進するために必須であるといえます。

多様性に富んだ学術チームとして考えられるのは、自然科学者と社会科学者、研究分野の異なる研究者、量的研究者と質的研究者、異文化間研究者、異なる大学の研究者、大学研究者と実践家 (現場で仕事に従事する人) などで構成された研究チームです。このような異質性の高いチームによって行われるチームサイエンスは、新しいアイデア、新しい方法論、新しい発見・知見をそれぞれの分野にもたらす可能性があります。チームサイエンスにもう一つ必要な要素として、異質性の統合の程度があります。たとえば、単に同じ分野の研究者が共同研究するという低いレベルの統合、異なる分野の研究者が共同研究するが、それぞれ独立的に研究し、異なる知見を加えるだけの中間レベルの統合、異なる分野の研究者の知見や方法論を融合する高いレベルの統合があります (Hall, 2014; National Research Council, 2015)。異質性の程度が高く、統合のレベルが高いチームサイエンスほど、その研究の生産性 (新しい理論の創出や発見など) がより高くなる可能性があります。

日本のコミュニケーション学発展を担うべく日本コミュニケーション学会においても、チームサイエンスは必要だと思えます。同じ分野の研究者だけでなく、異分野の研究者や研究のパラダイムが異なる研究者同士、また研究者と実践家の共同研究などのチームサイエンスによる研究発表や論文投稿を、本学会が奨励することは良いことなのではないかと考えています。

## 第49回年次大会 会場校案内

関東支部 松本 健太郎 (二松學舎大学)

次回の第49回年次大会は、6月8日(土)および9日(日)の両日、「都市とコミュニケーション」というテーマのもとで、東京都心に所在する二松學舎大学を舞台として開催される運びです。オリンピックを翌年に控える今、東京という都市は、現代的なコミュニケーション文化の実相をとらえるうえで、多種多様な素材や視角を供出しうる特権的な空間になりえているといえるでしょう。

昨今たしかに東京は、多種多様なテクノロジーやカルチャーが混交し、そこから新たな想像力がリキッドに生成される刺激的な場と化しています。たとえばインバウンド消費の拠点である渋谷、秋葉原、浅草など、首都を構成する各エリアのイメージとその移り変わりを想像してみてください。それらは個々に独自の地域的伝統をもちながら、他方ではそれをベースとして、また、SNS等のデジタル/ソーシャルメディアを介したコミュニケーションによって、訪日外国人を含む多くの人びとを誘引する魅力的なコンテンツを日々うみだしつつあります。あるいは虚構的なコンテンツにまで範囲をひろげて考えてみると、多種多様なSF作品に表象されるフィクショナルな都市像は、「今ここ」に束縛された人びとに対して、みずから生きる環境やその未来への洞察/問いかけをたえず提供してきたといえでしょう。そしてそう考えてみると、「都市」とはそこから未来に向けたイメージネーションが紡ぎだされる文化生成の源泉として把捉できるかもしれません。

むろん東京一極集中が叫ばれるなか、防災や福祉などの面で、現代の都市が無数の社会問題や、解決されるべき課題を抱えていることも事実でしょう。第49回年次大会ではそのような理解に依拠したうえで、また、私たちの社会/学会の未来を構想するためにも、東京という「都市」を舞台として、また、「都市」を鍵語としながら、そこで展開される「コミュニケーション」を学問的検討の俎上に載せたいと考えております。

大会に際しては、上記テーマにもとづく展望を拓くための基調講演が組まれるほか、それに関連した学術発表を募集いたします。ふるって御応募ください。また、発表の有無にかかわらず、できる限り多くの会員の皆様に御来場いただき、年次大会を研究交流の場としてご活用いただくことを期待しております。東京九段の二松學舎大学で皆様とお会いできることを楽しみにしております！



## 2018年度 第2回理事会報告

日 時：2018年12月22日(土) 13時00分～17時00分

会 場：関西大学東京センター（東京駅前サピアタワー9階）

2018年12月22日(土) 13:00 から2018年度第2回理事会が東京駅前サピアタワー内の「関西大学東京センター」にて開催された。21名の理事（委任状5名を含む）の出席により理事会は成立した。

### I. 会長挨拶

1988年以来、長く当学会に参加させていただいているが、年月を経てよい変化を遂げてきているように思う。これまで学術的なレベルの向上を目にしてきたが、今後の発展についても皆様と考えていきたい。ご支援いただけますようよろしくお願いいたします。

### II. 報告事項

#### 【1】第48回年次大会報告（長谷川）

大会を成功裏に終えることができた報告と、その感謝が述べられた。

#### 【2】各局および担当理事報告

##### 1. 事務局

###### (1) 入退会者および会費納入報告（高永、菅家）

・会員全体数（12月19日現在）の報告が行われた。

371名（一般会員 361名、学生会員 9名 準会員1名）

・入退会者の確認が行われた。

###### (2) 会計報告（松島）

年次大会会計報告が行われた。

###### (3) 全会計業務の移行にあったっての注意点（松島）

大会運営に発生する会計業務について報告された。それらの業務内容を整理し、委託していく方向となった。

###### (4) 献本の扱いについて（高永）

慶応義塾大学出版会出版部から以下の献本があったことが報告された。

ニック・クドリー（著）、Nick Couldry（著）、山腰 修三（監修、翻訳）『メディア・社会・世界:デジタルメディアと社会理論』、慶応義塾大学出版会、2018年。

###### (5) 叙勲対象者の情報問い合わせについて（高永）

研究機関から学会員の経歴について問い合わせが合ったことが報告された。今後の対応のため、歴代の会長・副会長の在任期間、学会賞の受賞者などの情報を整理していくことになった。

##### 2. 学術局

###### (1) ジャーナル関連(大橋)

i. 第47巻第1号の刊行（2018年11月30日に発行、著者にはPDF送付済み）

ii. 第47巻第2号の進捗状況（2018年7月31日投稿締め切り、HPは修正済み）

・現在査読結果に基づき著者が修正中、再査読論文も含めて9本中7本掲載可能。

- ・調査協力者からの同意の取り方について指摘があり、対応がなされた。また、今後、執筆要領の改訂が必要となる可能性がある旨が報告された。
- ・査読状況と基調講演をされた先生への原稿依頼について報告があった。
- iii. 過去にジャーナルに掲載した論文を著書に転載することへの許可について
  - ・規約の改正案を次回の理事会で提出する旨が報告された。

(2) 学会賞関連 (大橋、高井)

学会賞応募のお知らせの内容が報告され、詳細が決定された。また、学術局会議の開催予定が報告された。

(3) 年次大会関連(長谷川)

第49回年次大会について以下の報告が行われた。

日時： 2019年6月8日(土)～9日(日)  
会場： 二松學舎大学 九段キャンパス  
テーマ： 都市とコミュニケーション  
演題申し込み： 現在募集中 (学会ニュースレター 119号で告知)  
発表・企画申し込み締切 2019年1月末日 \*  
発表原稿提出締切 2019年2月末日 \*

\* 「発表・企画申し込み」「発表原稿提出」の締切は、12月22日の理事会後にあらためて審議をして2019年2月20日に変更となった。

3. 広報局

(1) ニュースレター119号の発行と120号の予定

ニュースレター119号(10月号)が発行された。次号120号(2月号)は2019年2月初旬発行予定で計画中。

(2) 他学会への年次大会送付について

昨年度は年次大会案内を以下の学会事務局へ送付した。今年度も同様に送付する予定である。送付不要あるいは新たに追加した方がよい学会があれば、お知らせいただきたい。

異文化間教育学会、多文化関係学会、日本マス・コミュニケーション学会、表象文化論学会、国際ビジネスコミュニケーション学会、映画英語教育学会、外国語教育メディア学会、大学英語教育学会、日本ディベート協会、SIETAR JAPAN (異文化コミュニケーション学会)、日本語用論学会、以上。

(3) 第49回年次大会広告、展示ブース募集について

- ・2019年1月中旬に広告・展示ブース設置依頼文を用意し、前年度同様に、広報局のリストと各理事からの新たな紹介先企業にe-mailにて送付する。第48回大会では、広告4社から協力をいただいた(朝倉書店、ナカニシヤ、ひつじ書房、有斐閣; 展示ブースなし)、今年度も各理事にぜひご紹介をお願いしたい。
- ・広告原稿の取り寄せと、プログラム担当及び印刷所への送付は3月末までの予定。
- ・会員組織以外にも、会員でない企業への依頼および参加もお願いする予定である。

(4) Web 関連 (石橋)

i. 以下についてHPに掲載した(6月年次大会以降、主な事項のみ抜粋)

- 7月：2018年度総会報告、平成30年7月豪雨お見舞い
- 8月：教員公募3件
- 9月：関連学会年次大会開催、北海道胆振東部地震お見舞い
- 10月：ニュースレター119号
- 11月：事務局連絡先変更
- 12月：紀要第48巻1号への投稿

- ii. HP 改修について (小山)  
正式発注を行いトップページのデザイン案を受け取った。
- iii. メーリングリストの構築について  
全会員に連絡可能なメーリングリストの構築を計画中

### 【3】各支部報告

各支部長より報告が行われた (内容は支部ニュースを参照)。

### 【4】各理事からの報告

#### 1. 50 周年記念担当理事 (宮原)

Asia-Pacific Communication Alliance との連携について 高井会長より 10 月末に中国の清華大学で行われた Asia-Pacific Academic Alliance for Communication and Journalism Association の大会参加報告があり、アジアの主要なコミュニケーション学会の連盟などについて話し合われた旨が報告された。

## III. 審議事項

### 【1】第 49 回年次大会関係

#### 1. 会場担当

基調講演者と内容 基調講演者とテーマについて審議が行われ、講演者選定と依頼の方針が決まった。

### 【2】各局関係

#### 1. 事務局

##### (1) マイページの開設について

マイページの開設について、情報項目、公開可否、会員検索条件などについて審議され、確認と準備を進めた上で、次回理事会での継続審議となる。

#### 2. 学術局

##### (1) 学術局員の増員について

運営委員の増員について承認された。また、運営委員の位置づけを明確にしていく方針が決まった。

#### 3. 広報局

##### (1) Web 関連

- ・メーリングリストの開設が承認された。
- ・トップページのデザインについて審議され、候補が絞られた。審議の内容をもとに準備を進め、次回の理事会での継続審議とした。

#### 4. その他

##### (1) 50 周年に向けての提案

以下の提案がなされ、審議の後、それらを進めていく方針が決まった。

- ・2020 年度年次大会時の ICA、JUCA など他学会との連携。
- ・記念誌出版としてテキストの執筆。
- ・今後 50 年を見すえ、関連他学会との連携を通し、コミュニケーション学とその領域の認知向上や資格認定試験の開発や実施。

【3】 その他

1. 次期体制について

今回の理事会にて改選する次期理事が提案され、承認の手続をとることになった。

2. 次回理事会開催日時・会場

3月29日(金)13:00～17:00 関西大学東京センター（丸の内サピアタワー9F）にて開催予定



## 第 48 回年次大会 会計報告

〈収入の部〉		〈支出の部〉	
大会参加費 (58 名)	240,500	<b>国際文献社委託関連</b>	
懇親会参加費	155,000	プロシーディングス作成費 (410 部)	203,239
弁当代	0	プロシーディングス発送費 (海外含む)	61,507
寄贈図書売上	0	チラシ製作費	67,000
ジャーナル売上	0	事前参加システム稼働準備費	20,000
広告費 (6 件)	40,000	事前参加システム利用料	50,000
展示費	0	オンライン決済接続費	20,000
助成金	0	参加者リスト作成費	5,000
学会補助	538,357	参加証兼領収書作成費	23,750
		クレジット・コンビニ利用手数料	17,400
		清算処理費	2,500
		受付備品送料	1,793
		業務管理費 (全体の 22%)	104,000
		消費税	40,917
		<b>小計 1</b>	<b>617,106</b>
		<b>大会実行委員</b>	
		講師謝礼	50,000
		懇親会費	158,830
		役員弁当代	15,000
		茶菓代	3,444
		人件費	0
		事務用品	3,169
		通信費	1,008
		西野学園施設使用料	125,300
		<b>小計 2</b>	<b>356,751</b>
<b>合計</b>	<b>973,857</b>	<b>合計 (小計 1+小計 2)</b>	<b>973,857</b>

## 備考

- ・ 2018 年度より会計年度が 4 月 1 日から 3 月 31 日までとなる。
- ・ 今年度の年次大会から委託業務が全て国際文献社に移行された。
- ・ 今年度は北海道医療大学の卒業生と在学生の方々がボランティアスタッフとして無償でお手伝いくださった。

## 事務局からのお知らせ

## 第49回年次大会 発表論文・企画セッション募集

日本コミュニケーション学会は2019年6月8日(土)・9日(日)に、二松學舎大学・九段キャンパス(東京)にて第49回年次大会の開催を予定しています。来年度のテーマは「都市とコミュニケーション」です。このテーマに関連した多数の企画を準備すると同時に、会員の皆様からの研究発表を募集いたします。

また、研究発表だけでなく、会員の相互の研究関心と教育実践の質的な向上を共有する「企画セッション」を募集します。形式は、パネルディスカッション、統一テーマの論文発表、ワークショップなど、自由な発想のもと、90分間のセッションを使って、学会のみならず社会に有効な企画をぜひお寄せください。

応募にあたりプログラムに掲載される要旨と大会プロシーディングス出版用の要旨の2種類をご提出ください。

①プログラム掲載用要旨：和文800字以内、若しくは英文300語以内

②プロシーディングス掲載用要旨：和文3000字以内(脚注含む)、若しくは英文1000語以内(脚注含む)

いずれも大会発表で使用する言語を用いて執筆し、必ずA4版2枚にすべてを収めてください。なお、パネルなどの企画セッションに応募する場合、パネル全体としてそのセッションの概要を800字(プログラム用)と3000字(プロシーディングス用)の要旨にしてA4版2枚以内に収めてください。詳しくはJCAホームページのプロシーディングス投稿規定を参照ください。

応募の際は、メールの題目/subjectに「JCA submission:氏名」と必ず明記し、[jca2019\[@を代入\]yahoo.co.jp](mailto:jca2019[@を代入]yahoo.co.jp)まで電子メールでお送りください。なお担当理事の長谷川聡宛([haseg\[@を代入\]hoku-iryo-u.ac.jp](mailto:haseg[@を代入]hoku-iryo-u.ac.jp))にすでにお送りいただいている場合、再送信は必要ございません。応募締め切りは2019年2月20日(水)となります(JCAニュースレター No. 119にある締め切りから変更になっています)ので、期日には十分ご注意ください。

大会の個人研究発表では第一筆者(及び発表を行う当事者)がJCAの会員であることが規定によって定められています。応募時までにはJCAの会員登録をお済ませいただき、氏名の下に会員番号を表記してください。また、年会費の未納により会員資格を失うという事案が発生していますので、合わせてご注意ください。

発表申し込みに関しましては学会ホームページ(<http://www.caj1971.com/>)でもご覧いただけます。活気に満ちた大会になるよう、積極的に発表申し込みをいただきたく、ここにお願い申し上げます。

## Call for Papers for the 49th JCA Annual Convention

The Japan Communication Association is planning to hold its 49th Annual Convention on Saturday, June 8th and Sunday, June 9th, 2019, at Nishogakusha University, Kudan campus (Tokyo). The theme of the Convention will be “Urban Communities and Communication.” JCA will be inviting proposals for individual or panel presentations for competitive research papers concerning any subject of communication studies. Additionally, we would like to particularly invite a unique and quality session that contributes to the JCA members and stimulates our membership activities. The format of this theme session may vary depending on the session’s objectives, such as a thematically organized paper session, a panel symposium, or a workshop. We appreciate a proposal that facilitates research activities and teaching practices as well as encourages information sharing beneficial for the JCA members.

Those wishing to propose a paper presentation or a panel discussion should send an e-mail to [jca2019@yahoo.co.jp](mailto:jca2019@yahoo.co.jp) by Wednesday, February 20th, 2019 (in case you have already e-mailed your submission to Satoshi Hasegawa at [haseg\[h\]@hoku-iryo-u.ac.jp](mailto:haseg[h]@hoku-iryo-u.ac.jp), no re-submission is necessary). The following two forms of abstracts should be submitted with the e-mail for proposing an individual presentation: (1) For the convention program: 300 words or less in English or 800 characters or less in Japanese (2) For the proceedings: maximum of 1000 words in English (including foot/endnotes) or 3000 characters in Japanese (including foot/endnotes). Both abstracts must be under 2 pages on A4-size paper, and should be written in the language to be used in your presentation. Those who wish to propose a panel or a theme session, the e-mail should be sent with an attachment file of the session overview in 300 words or less in English or 800 characters or less in Japanese, 2 pages maximum; abstracts of individual presenters are unnecessary. Refer to the Submission Guidelines for JCA proceedings at JCA website, and precisely follow the guidelines. Also, for your submission, please specifically type “JCA submission: [name]” on the subject of your e-mail.

The first author of the paper as well as the presenter in the Convention must be a JCA member. If these responsible persons do not have JCA membership, please join the JCA before submission and indicate the membership number on your paper. We also recommend the current members to confirm your membership status, because it is often lost by not paying the annual fee. Those of you interested in submitting a proposal, please refer to the JCA homepage (<http://www.caj1971.com/>) for the submission requirements. We look forward to seeing you in Tokyo!

## 学会誌に関するお知らせ

2018年11月に『日本コミュニケーション研究』第47巻第1号が無事発行されました。現在は2019年5月末に発行予定となっている第47巻第2号の準備が進められています。また、第48巻第1号の締め切りは1月末に終了しました。こちらは2019年11月末の発行を目指し、目下査読作業の準備が行われています。

2月1日より、第48巻2号(2020年5月末発行予定)への投稿論文を募集しています。締め切りは5か月後の7月末日です。是非皆様の研究論文をご投稿ください。投稿の際は(1)「論文」、(2)「シノプシス」、(3)「著者情報、並びに原稿作成に用いたOS及びソフトウェアなどの情報」の3つのファイルを、指定メールアドレス宛に添付ファイルで送付してください。執筆・投稿の詳細は、公式ホームページにある「研究論文集投稿規程」・「学会誌執筆要項」を参照してください。

送付の際、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付してください。メールアドレスは以下の通りです。

**To: [journal@\[をを入れる\]caj1971.com](mailto:journal@[をを入れる]caj1971.com)**

**CC: [ohashiri@\[をを入れる\]ouj.ac.jp](mailto:ohashiri@[をを入れる]ouj.ac.jp)**

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の大橋(ohashiri@[ouj.ac.jp])までご連絡下さい。可能な限り迅速に対応いたします。

本学会では投稿された研究論文に対し、妥当性、体裁、研究方法(データ収集方法等含む)の適切性・倫理性、分析の緻密性・独創性、そして表現の明確性・厳密性の5点の規準で査読を行っています。今回は二番目の体裁について説明します。体裁の規準というのは、投稿論文が然るべき体裁に則って書かれているかどうかということです。具体的には執筆要領に定められている書き方が守られているかどうかを審査します。但し、体裁に関する最終的な責任は著者側にあるという点は、念頭に置いておいて下さい。例えば、執筆要領第7条には「論文末尾の文献一覧には、本文中で直接・間接引用または出典引証された文献(すなわち引用文献)のみを含めること。論文作成に際し参照したが文中で引用のない文献(すなわち参考文献)は文献一覧に含めない。」と規定されていますが、実際に本文中で言及された文献が巻末の文献一覧に載っているか、また本文中で言及されていない文献が文献一覧に載っていないか、という点を確認する最終責任は著者側にあるということです。また、文献を記載する際の体裁の細則についても、著者の方でご確認頂けるよう、お願い致します。

皆様の研究成果のご投稿をお待ち申し上げております。

(副学術局長:ジャーナル担当 大橋 理枝)

## 学会賞応募に関するお知らせ

当学会では、学会賞審査対象の著書を募集しております。これまでに出版された本学会員によるオリジナルの著作のうち、過去5年間に応募していないものが対象となります。共著・分担執筆による著作については、すべての執筆者が本学会員である必要はありませんが、著作への本学会員の貢献が顕著と認められるものについて審査の対象とします。応募資格に関して不明な点がある場合は、事前に下記問い合わせ先にお問い合わせください。締め切りは2019年2月15日(必着)となります。応募される会員は下記要領に従い応募してください。なお、審査結果の報告は、年次大会の授賞式での発表に代えさせていただきます。

### 応募要領

応募資格：正会員

応募方法：応募者は審査用著書3冊とともに、1000字程度の著作概略および著者の名前・連絡先を明記したものを添えて応募してください(尚、著書は返却いたしませんのでご了承ください)。

応募数量：会員一人一冊まで応募可(自薦、他薦は問いません)

問い合わせ先：下記2名に同報送信でお願いします。

学術局長 山口生史 ikuy[@を入れる]meiji.ac.jp

副学術局長 大橋理枝 ohashiri[@を入れる]ouj.ac.jp

審査書類一式提出先：副学術局長 大橋理枝

住所：〒261-8586 千葉県美浜区若葉 2-11 放送大学教養学部

電話：043-298-4112

ファックス：043-298-4379

E-mail: ohashiri[@を入れる]ouj.ac.jp

## 事務局報告

### 事務局からのご報告とお願い

#### 1. 事務局の電話番号・FAX番号の変更

事務局の電話番号とFAX番号が昨年11月26日に変更されました。新しい電話番号・FAX番号は次のとおりです。 ※日本コミュニケーション学会のHP上では告知済み。

新しい電話番号：03-6824-9372

新しいFAX番号：03-5227-8631

#### 2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には、速やかに日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までメール、郵送、ファックスのいずれかの方法でご連絡ください。年会費の振込用紙での変更届けはできませんのでご了承ください。なお、今年度から学会事務局の連絡先が変更になりましたので、届けを出す際には学会のHPでご確認ください。

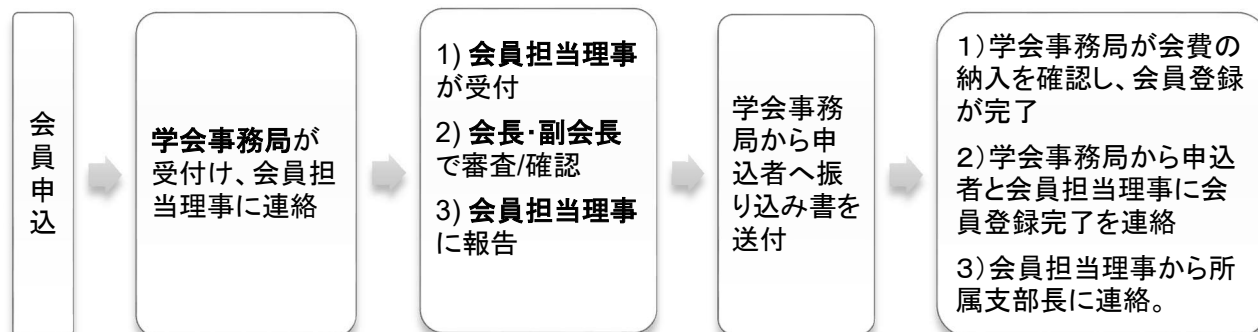
#### 3. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システムJ-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

#### 4. 新規会員の手続き

JCAでは新しい会員を随時受け付けています。次頁のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がございましたら、学会事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い申し上げます。

皆様のご協力をお願い申し上げます。



## 広報局便り

### 広報局からのお知らせ

- ① 事務局と連携して、2019 年度を目処に HP 掲載コンテンツの拡充ならびにレイアウトの見直しを計画しています。
- ② 現在、全国版の ML の構築を計画しております。JCA ニュースレター119 号 21 頁のご案内を参照いただき、メールアドレスの登録（または更新）をお願いいたします。
- ③ 広報局では他学会の情報や教員公募情報なども積極的にアップロードしていくことにしております。現在も、いくつかの研究学会の年次大会案内や教員公募などの情報をアップロードしています。ぜひ、ご活用ください。
- ④ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。
- ⑤ ホームページ (<http://www.caj1971.com>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸いです。

## JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：田島慎朗 (tajima-n[@を入れる]kanda.kuis.ac.jp)

### ① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文で 250～500 字程度の原稿を受け付けております。

### ② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

### ③ 書評

コミュニケーションおよび関連領域の著書に関する書評を受け付けております。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

### ④ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会の NL 表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。(写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。)



## 書評

『&lt;ヤンチャな子ら&gt;のエスノグラフィー——ヤンキーの生活世界を描き出す—』

知念渉著、青弓社、2018年。

田島慎朗（神田外語大学）

本書は<ヤンチャな子ら>の実態を探る一般向けの教養書である。ここでは、この図書を質的研究のだいご味を味わうための一冊として、そして若者文化を知るための良書として紹介したい。

まず一点目の調査法について、正直に申し上げると私はレトリック研究の教育を主に受けてきて、エスノグラフィーは今まで片手で数えるほどしかしたことがない。初めての体験は大学院時代で、御多分に漏れずカリキュラム上全員に課された研究法のクラスであった。結果、クラスから学ぶことは多く、講師は人格的にも技術的にも申し分ない方だった。それにも拘わらず、当時、私は質的調査に付随する一連の作業が面倒くさく、図書館や本屋に行けばもっと面白い題材はあふれているし、映画館やテレビでは「素人」の所作やインタビュー回答よりもっと厳選されて作り込まれ、深み（つまり、主観的に感じる批評のしがい）のあるものがあるじゃないか！と思いついていた。

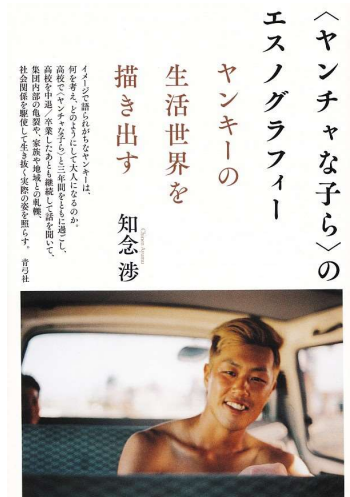
この著書を前にすると、当時の自分の愚かさを感じ、また現在の研究者としての姿勢を正される思いがする。著者は大学院に入ってからすぐ大阪府のある公立高校への参与観察を始め、当時高校一年生だった生徒を卒業後まで、約十年間追っかけてきている。それもただの高校ではなく、「同和教育運動の影響を強く受けた」地域にあり、「ひとり親家庭率は50パーセント以上、生活保護世帯率は約30パーセント」、「入学時の生徒数に対して卒業時の生徒数が3分の2になる」ようなところである（p.20）。「そっけない返事をされたり無視されたりすることが多かった」（p.22）が、そのうちに仲良くなった14人とインタビューを重ねていくうちに調査対象者と決めていくという手法で<ヤンチャな子ら>を特定していくという対象の定め方には、粘り強さを感じさせる。

数少ないインタビューや参与観察の経験で、私は自分の主体性とエージェンシーをどうマネジメントするかがとても難しかったのが強烈に記憶に残っている。例えば、普段はいつも居ないはずの私が「その場」にいるということや、インタビューというインタラクティブな場にお

いて私個人が背負っている特徴や資質を抜きに、どう状況を「いつも通り」だと主張し、インフォマントに「ありのまま」を話してもらえるのかという（非常に初歩的な）部分で悩んでいたのである。この部分において、著者は卓越しているように思う。この研究法が

日の目を見るのは第二章から第五章までで、それぞれ教師との関係（第二章）、<インキャラ>ということばの使われ方から<ヤンチャな子>を再定義すること（第三章）、家族との関係と影響（第四章）、そして労働への移行と仕事現場からの影響（第五章）がテーマになっている。各章では<ヤンチャな子>たちがあけすけな関係を語る様子が描かれ、それによって彼らの世界が生き生きと描かれる。もし私が調査者だったら<ヤンチャな子>が幼稚園から小学校の時「スイミングとピアノ、英会話をやっていためっちゃめっちゃエリート」（p.178）だったことを聞きだせるだろうか、自殺未遂までに至る流れ（p.192）をこんなに詳細に話してくれるだろうか、また、ここまで精巧に<ヤンチャな子>と<インキャラ>のイメージ画像（p.23, 121）を描いてもらえるだろうか。こんなことを思うと、彼らとの関係の作り方には調査者としての著者の力量を感じさせる。エスノグラフィックな研究法は、ここ数年『atプラス』や『現代思想』などでとりあげられるホットなトピックだし、この研究法を採用した良書は最近よく目にする。この本もそうした一群の研究成果に引けをとらない一冊であると思う。

そして二点目の若者文化について、序章と第一章では、1970年代から登場した「ヤンキー」に対する語りをそれぞれ一般向けのものと学術的なものとで区別しながら、今までこうした若者に対して一般メディアならびに日本



の学者がどのように語ってきたのかを紹介している。本書は「ヤンキー語り」について、学校文化や階級、ライフコースがどの程度自明視されているかといった点から分類化しているが、これらは若者文化の（語りの）歴史と現在の若者のあり方を理解するうえで大きなヒントを与えてくれるに違いない。

著書に記述される〈ヤンチャな子ら〉のコミュニケーションのあり方は、読書前に想定していたものとはだいぶ違い、そこにも驚きがあった。非行少年と言えば自分達をマチズモ的に規定して学校制度や教師に歯向かっているものだと一様に理解されがちだ。しかし、彼らは「日々の生活のなかで教師たちと対立する場面がありながらも、基本的には教師たちを非常に肯定的に評価」（p.102）しており、学校内のコミュニケーションも戦略的かつ複雑なものとして描かれる。その詳細は是非本書を手にとって確認してほしいが、私の中学・高校時代の同窓のヤンキーはこんなに複雑なコミュニケーション環境を生きていなかった（ように少なくとも私には思える）。本書では描かれたコミュニケーションが複雑で現代的な社会や家庭の様相とからめて論じられるので、現代の若者文化や家族、被差別部落を研究するコミュニケーションの専門家にも多いに示唆を与えると思う。

この本は著者の博士論文をもとにしていて、各章がすでに学術論文として刊行されている。そのため、記述を重ねてリアリティを出したり証明を強化するよりも、社会学理論や先行研究への言及を優先させるところもある。また、各方面の研究者からは細部につっこみどころがあるのかもしれない。しかし、こうした部分を考慮しても、この本がコミュニケーション研究者にもたらすものは少なくない。特に、終章で、著者は〈ヤンキー〉をどうカテゴライズするかという言語・認識の問題や、家族・学校・地域との多層的な関係の中でヤンチャな子らを考え直す必要、そしてヤンチャな子らを考えることは他者包摂や共同体編成の問題であることを訴える。この部分の議論は、コミュニケーション研究者に広く訴えることだろう。

私のようなエスノグラフィーの門外漢にも、学生が触れてきた学校文化をよりよく理解したいという大学教員にも、そしてもちろんこの分野に深く携わってきた研究者にも、この本はコミュニケーションの研究・教育活動に広く役立つ一冊だと思う。

# 支部ニュース

## 北海道支部

(支部長 佐々木 智之)

第27回支部研究大会を、2018年12月8日(土) 天使大学にて開催しました。

今回は「天気予報とことば～専門家の定義と民衆の解釈～」と題して、気象予報士の菅井貴子さんにご講演をいただきました。まず今日の天気、冬の天気図の読み取り、9月に起こった震災時の情報伝達など、北海道に根ざした題材で聞き手とのインタラクションが起こります。本題に入り、私達が普段テレビやラジオで耳にしている「天気の表現」(時々雨、春一番、猛暑日、真冬日、初雪など)にある厳密な定義や数値の基準など、伝える側の厳しさを知りました。転じて「晴れ」をあらゆる表現のパラティ(五月晴れ、雲ひとつない、洗濯日和など)、季節を表すことばにもなる霞、朧、小春日和など、日本語の豊かさに浸ります。伝える側のデータにもとづく正確な発信が、受け取る側に時として情緒的な解釈をもたらすコミュニケーション。90分があつという間で、同じ長さの時間で講義する大学教員は、明瞭な音声、聞き手を引きつける展開の大切さを再確認する場にもなりました。

実践報告は長谷川聡先生(北海道医療大学)の「被災と地域コミュニケーション～札幌市北区の被災現場からのショートレポート」、竹内康二先生(札幌国際大学)の「第2言語のリーディングとスキーマ形成」、佐々木智之(北海道科学大学)の「人物設定をした日本語による対話活動」の3つでした。

今年度も大学英語教育学会(JACET)北海道支部と北海道英語教育学会(HELES)との合同研究会を2019年3月3日(日)に北海道科学大学サテライトキャンパス(札幌市中央区)で開催します。お時間のある方は是非ご参加ください。



お問い合わせ先: JCA北海道支部事務局 目時光紀  
[metoki0702\[@を入れる\]gmail.com](mailto:metoki0702[@を入れる]gmail.com)

## 東北支部

(支部長 関 久美子)

2018年12月1日(土)、「ヒューマンコミュニケーション」をテーマに第19回東北支部研究大会が仙台で開催されました。

### 【シンポジウム】

シンポジストに尚絅学院大学の黄梅英先生と呉正培をお招きし、司会兼シンポジストとして同じく尚絅学院大学の會澤まりえ先生の進行のもと「ヒューマンコミュニケーションと自己開示」と題して、日中韓の大学生を対象に異文化接触場面で生じる自己開示の問題を明らかにしつつ、実際のコミュニケーション場面での対応方法について参加者と共にディスカッションを行いました。



## 【研究発表4件】

- ・ 「マインドフルネスについて～ヨガでの実践も踏まえて～」宮曾 根美香（東北工業大学）
- ・ 「ヒューマンライブラリーの意義とベンヤミンの芸術論から考察する『私の語り』について～『司書』と『本』の立場から～」関 久美子（新潟青陵大学短期大学部）、五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）
- ・ 「モンゴルの各政治体制下における歴史教育の変遷～1920年以降の教育の変化とその社会背景～」ザルガバートル・アラタントール（尚絅学院大学大学院 院生）
- ・ 「北東北に留学するアジア圏留学生の実態調査：異文化接触と日本語学習の状況」石橋 嘉一（青森中央学院大学）、大池 森（青森中央学院大学）

## 東北支部定例研究会のご案内

2019年3月24日（日）12:30より仙台市（東北工業大学一番町ロビー）にて2018年度東北支部定例研究会を開催します。研究発表および教育実践報告などご発表を希望される方は2019年2月28（木）までに「氏名、所属、連絡先、タイトル、要旨（200～300字程度）」を関<ksekif@>を入れる]n-seriyo.ac.jp>までメールでお送りください。



## 関東支部

(支部長 小西 卓三)

JCA 関東支部は2019年3月に以下の活動を計画しております。

## 1. シンポジウム「コミュニケーション学の現在」

2017年6月のJCA第47回年次大会では、「コミュニケーションと未来」というタイトルで、未来を見据えた上でコミュニケーション学について議論が行われました。ここでは、年次大会への一つの答えとして、「コミュニケーション学の現在」と銘打ち、これまでのコミュニケーション学とその現在のあり方について、様々な立場から考える機会を提供したいと思います。

日時： 2019年3月2日（土）13:00-17:00

場所： 二松學舎大学 九段キャンパス  
1号館507教室（5階）

登壇者：高井次郎（JCA 会長）

青沼智（JCA 副会長）

五島幸一（JCA 前会長、現理事）

参加費：無料

参加連絡先：tkonishif@&gt;を入れる]swu.ac.jp

## 2. 卒業論文・卒業制作合同発表会

コミュニケーション研究者同士の交流の機会は少なからず存在しますが、大学の学部でコミュニケーション学を学ぶ学生間の交流の機会はそれほど提供されてこなかったように思われます。そこで、卒業論文・卒業制作の合同発表会を行うことで、コミュニケーション学の多様性や楽しさを感じる機会を提供していきます。

日時： 2019年3月2日（土）10:00-12:30

場所： 二松學舎大学 九段キャンパス  
1号館507教室（5階）

参加費：無料

参加連絡先：k-matsumf@&gt;を入れる]nishogakusha-u.ac.jp

※ 参加・見学を希望する方はメールにて参加申し込みをお知らせ下さい。JCA 会員でない方も参加可能です。

二松學舎大学 キャンパス アクセス方法

<https://www.nishogakusha-u.ac.jp/about/campus/a7.html>

皆さま、どうぞふるってご参加ください。



## 中部支部

(支部長 森泉 哲)

## 2018年度第1回研究会開催報告

今年度第1回の研究会を2018年9月14日（金）に南山大学で実施いたしました。招待講演として、北村雅則先生に「異文化への適応過程に見られるコミュニ

ケーション能力の獲得と変容の記述—海外在住経験を持つ日本人サッカー選手へのインタビューを通して—というタイトルでご講演いただきました。プロサッカー選手になんとしてでもなるという確固たる目標をもち生きている選手の強い信念をうかがわせる内容でした。異文化研究を行っていると、アイデンティティの揺らぎ、変化など流動性に注目しがちですが、それ以上に揺らぎのない彼らの信念の強さは大変迫力がありました。

後半は、運営会議をかねて、今後の体制について話し合いを行いました。できるだけ多くの方が参加しやすく、会員の先生方の教育・研究をコミュニケーション学会支部として支援していくには何ができるのかについて考えました。とりあえず、従来12月に行っていた支部研究大会を、学部生・院生の論文の発表の機会にもなる3月の時期にずらしてみることになりました。また今後2年間の支部の運営委員の役割についても決定しました。

#### 2018年度第2回研究会開催のご案内

上記のように、従来12月に開催していました支部大会を3月に第2回研究会として実施することになりました。そこで、以下のようなプログラムで開催いたしますので、ぜひ奮ってご参加ください。

日時：2019年3月9日（土）12:00-17:50

会場：南山大学Q棟Q504, Q606

#### タイムスケジュール

12:00-13:00 支部研究についてのディスカッション

13:15-14:15 パネル「17世紀の表象文化とコミュニケーション学」

発表者：柿田秀樹先生（獨協大学）・松島綾先生（立命館大学）

レスポネント：宮崎新先生（名城大学）

14:30-15:30

基調講演(1) 毛利 雅子先生（豊橋技術科学大学）

「日本における司法通訳の現状と今後の課題」

15:40-16:40

基調講演(2) 小坂貴志先生（神田外語大学）

「通訳ボランティアの存在論と育成上の課題」

16:50-17:50

毛利先生・小坂先生を交えて質疑応答・ディスカッション

17:50 閉会

18:10 懇親会

※お問い合わせ・懇親会の出欠については、森泉（[moriizum\[at\]nanzan-u.ac.jp](mailto:moriizum[at]nanzan-u.ac.jp)）までお願いいたします。

中部支部のHPも合わせて更新をしていただきましたので、機会がありましたらご覧ください。

<http://www.caj1971.com/~chubu/gaiyou.html>



（支部長 守崎 誠一）

2018年11月10日（土）に、関西大学梅田キャンパスにて、2018年度の関西支部秋季研究会が開催されました（参加者は6名）。

最初に、関西支部長の守崎誠一が挨拶したのち、春季大会を開催できなかったことに対するお詫びと、本来春季大会で承認の必要のあった事項が支部MLを使ったメール審議により了承されたことが報告されました。また、審議の結果、2018年度春期大会を2019年3月23日（土）に開催（予定）することが決定されました。

その後、参加者全員がそれぞれ現在関心を持っているコミュニケーション関連の話題を発言した後、それを基に出席者間で活発な議論がおこなわれました。研究会の終了後、会場近くの喫茶店で茶話会が開かれ、6名での楽しい交流会となりました。



## 中国・四国支部

(支部長 脇 忠幸)

中国四国支部では、去る11月24日(土)に福山大学宮地茂記念館にて第21回支部大会を開催いたしました。今回から新たに「地域を/で研究すること」をテーマとしました。プログラムの概要は以下の通りです。

学術発表①川野 泰崇 (広島大学附属三原中学校)

「プレゼンテーション・ディスカッション活動における高校生が抱える困難点の特定について」

学術発表②Warren Tang (福山大学)

“The Mental Spaces of Zen Koans - An Investigation into Its Logic -”

学術発表③脇 忠幸 (福山大学)

「文科省・文化庁における『コミュニケーション(能力)』観の変遷」

Symposium「コミュニケーション研究・教育と『地域』」

司会：脇 忠幸 (福山大学)

登壇者：脇 忠幸 (福山大学) / 谷口 直隆 (広島修道大学) / 高永 茂 (広島大学)

全体ディスカッション



今回は、新たな試みとしてシンポジウムを企画いたしました。地方で研究・教育することによるどのような問題と意義がありうるのか、地域社会はどのような問題を抱えているのか、それらに対して研究者・教育者として、また支部として何をすべきなのか、実に濃い議論を交わしました。今後も回数を重ねることで、議論をブラッシュアップしていきたいと考えております。

懇親会では、新たに学会員となった川野先生が、脇と同郷なうえに大学の後輩であり(キャンパスですれ違ったかも?)、共通の知り合いまでいたというミラクル連発でした。

来年度も引き続き「地域」について議論を交わす予定です。ぜひご参加ください。



## 九州支部

(支部長 池田 理知子)

2018年9月22日(土)、第25回支部大会をJ.COMホルトホール大分(大分市)で開催しました。清水孝子大会実行委員長のもと、前大会の議論を受け、引き続き記憶の継承について議論を深めていくという意味を込めて、大会テーマは「記憶の継承 Part IIーコミュニケーション学の視点からー」となりました。一般からの参加者を含めて40名がそれぞれの立場から、議論に参加してくださいました。

今回は研究発表が8本、パネルディスカッションが1本と、例年通り支部の規模からするとかなりの数の発表申し込みがありました。支部会員以外の参加者がいるという九州支部の特徴もみられた発表者の顔ぶれでした。

一般にも公開するという形で行われた基調講演とその後のパネルディスカッションでは、「大分プランゲ文庫の会」の活動を通して占領下の記憶をどのようにつないでいくのかを参加者全員で考えました。まず、その会の代表である白土康代氏から、「記憶の継承ー地域の共有財産としてのプランゲ文庫ー」と題した講演があり、その後、白土氏のほかに二人のパネリスト(大分放送報道部記者兼番組プロデューサーの佐藤陽子氏・別府の歴史研究家の小野弘氏)を交えて、さらに

活発な議論が交わされました。詳細はホームページ (<http://www.caj1971.com/~kyushu>) に掲載されている九州支部のニューズレターをご覧ください。



▲発表風景



▲パネルディスカッションの3人の登壇者

支部大会の報告を含め、さまざまな記事や会員からのメッセージが載っている支部ニューズレター（第32号）は、2018年12月に発行されました。是非ご覧ください。

また、9月に発行された支部紀要『九州コミュニケーション研究』（KYUSHU COMMUNICATION STUDIES）第16号も支部のホームページにアップされておりますので、こちらもご一読ください。第24回九州支部大会での発表をベースにした特集記事と、研究発表論文1本が掲載されています。

## 連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

Fax: 03-5227-8631

[jcom-post\[at\]bunken.co.jp](mailto:jcom-post[at]bunken.co.jp)

<http://caj1971.com>

# NL の電子版への完全移行のお知らせと メールアドレス登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

日本コミュニケーション学会ニューズレターは永きにわたり紙媒体でお届けして参りましたが、107号より電子版に完全移行いたしました。当面はPDF版をHPに掲載する予定ですが、将来的には学会全体のメーリングリストを構築してのメールマガジンの配信も視野に入れ、さらに検討を続けていきます。

つきましては、会員の皆様には、本学会HP（学会支援機構データベース）にてメールアドレスの登録をお願い申し上げます（下記の方法をご覧ください。）今後、NLの配信を含めた学会の広報活動を効率化し、会員の皆様とより情報価の高いコミュニケーションを取れますよう、ご協力をお願いいたします。

- ① 本学会 HP (<http://www.caj1971.com>) にアクセス
  - ② 左側メニュー「会員各種手続き (Membership)」をクリック
  - ③ ページ中頃の「各種変更手続き」の下「1.オンラインでWeb登録情報確認・変更、会費残高照会のページ」をクリック
  - ④ 会員番号とパスワードを利用してログインし、メールアドレスを登録（変更）して下さい。
    - \* ご登録いただきましたメールアドレスは、学会（学生支援機構）が責任を持って管理し、学会からのお知らせの配信（および、これに係るメーリングリストの構築）以外の目的では使用しません。
- 会員番号は、学会からの郵送物の宛名ラベルの中に印字されています（10桁の番号）
  - パスワードをお忘れの場合には、上記④の画面で、「パスワードの問い合わせ」をクリックして手続きを行って下さい。

## 編集後記

今回のニューズレターは学術局の山口生史先生に巻頭言をお願いし、コミュニケーション研究への社会科学的なアプローチの重要性を論じていただきました。今まで人文的——あるいは、NCA的——なところにまとまりがちなJCAのバランスを保ち、コミュニケーションに対する人文的アプローチと社会科学的なアプローチのバランスをよくしていくためには、とても貴重なご意見だと思います。また、私も慣れないエスノグラフィーという手法を使った良書を書評欄で扱ってみました。レトリック研究の分野では *Participatory Critical Rhetoric* (2015) や *Text + Field* (2016) といった著作に明確に表明されていますが、今後はさらなる人文学と社会科学の知見の融合が求められるようになると思います。JCAという組織がそれを可能にする場になれば願っています。

広報局 ニューズレター担当 田島慎朗